連載 ベトナム歩道

寺本　実

第12回　音

経済発展が続く現在のベトナムでは、建築現場が無数にある。既存の建物を壊して新たな建物を作る作業過程もよくみられる。街を歩いている時や仕事場の窓を通して、高所で作業員が自分自身の立っている足元付近めがけてハンマーを振り下ろす作業を何度もみた。当の作業員達は臆している風にみえない。ポイントを探してはハンマーを振り下ろし、少しずつ移動していく。命を懸けた、破壊と創生に向けた衝突音は、その場を離れ、時を経ても耳に残る。

二〇一五年にホーチミン市内で迎えたテト（旧正月）。普段、バイク、自動車のエンジン音、クラクション止むことなき街が、静けさを湛えていた。ほとんどの店がシャッターを閉めてしまい、「テト難民」と化した旅行客達がガイドブックを片手に街を歩き回っている。それまであたりまえと思っていた街の喧騒が、必ずしもそうではないことを学んだ。

このテトを、近年のベトナムの大都市では盛大な花火で迎える。陽暦の新年も同様である。カウントダウン終了と同時に「ドーン、ドーン」と連続音が鳴り響き、舞い上がった火の玉が最高点に到達すると、「バン」と弾けて夜空に色とりどりの花を咲かせる。風向きによっては打ち上げ時に出る白煙に妨げられることもあるが、発射音とは対照的な可憐な美しさにしばし時を忘れる。

「ドン」、「ドン」という音といえば太鼓の音。ベトナムでは式典や、学校での時の合図として太鼓がしばしば用いられる。筆者のような素人では、日本とベトナムの太鼓の区別はつかない。空気を揺らして隅々に伝わるその音は、時代を経て残ってきたベトナムの音のひとつなのだろう。

街中で迫力ある音の発信源といえば、企業、商店の商品プロモーションの催しもある。大量の色鮮やかな風船を飾り付けたセット上に据えられたスピーカーが鳴動し、場を盛り上げようとする司会者の声と音楽が、行き交う人達の耳に無遠慮にアクセスする。

カラオケも忘れてはならない。ホーチミン市赴任時（二〇一四年三月から二〇一五年三月）には、飲食店が住居近くにあったため、深夜までカラオケの音が鳴り響いていた。静まり返ったテトの街中でも、細長い机を歩道上に出してカラオケ機器を置き、照れくさそうに歌を楽しむ人達の姿をみかけた。

都市部だけでなく農村部にもカラオケは浸透している。ホーチミン市に生産拠点を持つカラオケスピーカーの製造を得意とするあるメーカーでは、多くの体の不自由な労働者が活躍していた。この企業はベトナム全国の農民、労働者層を主なターゲットにしていた。

少し前にベトナムの中部北方地域の農村部で調査を行った際、お世話になった方の自宅にカラオケセットがあった。

昼休みの時間、付近の人がやって来て歌が始まった。かなりの音量。筆者はとなりの部屋で横になっていたのだが、歌を聴いていて急に差し込みに襲われた。大波小波のせめぎ合いの末、ほどなく厠に駆け込んだ。しかし、用を足したのはいいものの、その時は作法が分からなかった。迷った挙句、拭いた新聞紙を生産物の上に置いて外へ出た。お宅の小学生の娘さんと友人達が日本人を一目みようと集まっていて恥ずかしかった。子ども達は筆者の残した「生きた教材」を通して人間は皆同じだということを確認したのではなかろうか。

人工音から離れ、自然の音といえばまず雨音だろう。通りを移動中、黒い雨雲が近づくと、下界ではさやさやと風が舞い、路上に落ちた葉やゴミ等がうごめき始める。気配を察したバイクや自転車で移動中の人達は、車両を道路脇に止め、愛用の雨合羽を身に着ける。しばらくすると、自身と周囲の人達、道路、建物を雨が打つ音、動く度に雨合羽が擦れ合う音との協奏に包まれる。

雷音はかなり迫力がある。バリバリっと暗くなった空を引き裂く稲妻を上空に確認し、「一、二、三…」と数えると「ドドォッ」と重厚な振動音。気象科学が発達していなかった昔、ベトナムの人々はどのような意味を込めてこうした天候を認識したのだろうか。

最後の音は蚊の羽音。最も記憶に残っているのは、ベトナム中部北方地域で調査を行った際に出会った蚊達。調査地近くにある宿屋の二階の部屋に滞在していたが、外壁に穴がひとつ空いていた。ベッドの蚊遣りにも複数の綻びがあった。日中の調査、夕食を終えて部屋に戻り、ほぼ水状態のシャワーを浴びる。洗面台に水を溜めて洗濯粉を溶かし、洗濯物をしばらく浸した後、手で擦り、濯ぎ、絞って干す。次にベッドに蚊遣りを張って、その日書き込んだ調査票をチェックし、調査日記を記す。

日課を終えて横になると、蚊との戦いに専念することに。抑揚のある繊細な蚊の羽音に、「ピシッ」と肌を打ち付ける音が時折交じり、響く。蚊と人の織りなす「交響曲」。お互いに真剣な演奏がしばらく続いた。

（てらもと　みのる／アジア経済研究所　東南アジア研究グループ）